



Title	寺院塔心礎出土耳環の分類と編年
Author(s)	横田, 真吾
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2026, 59, p. 27-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104568
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

寺院塔心礎出土耳環の分類と編年

横 田 真 吾

キーワード：古墳時代／飛鳥時代／塔心礎／耳環／編年

はじめに

寺院塔心礎出土耳環研究の現状 寺院塔心礎より出土した耳環は、舍利荘嚴具としての埋納年代が明らかな奈良県飛鳥寺（法興寺）以外に、大阪府四天王寺・奈良県中宮寺跡（以下、中宮寺）・奈良県尼寺北廃寺（以下、尼寺廃寺）のものが知られている¹⁾。飛鳥寺では埋納行為の実年代が判明していること、塔心礎は古墳のような追葬がないことなどから、ある時点での一括性、同時代での共存性が保証され、寺院塔心礎出土耳環がもつ考古学研究上の重要性は明白である²⁾。しかし、耳環は分類にもとづいた体系的な編年という考古学研究の基礎的な作業も未だにおこなわれておらず、各塔心礎出土耳環も後述のように、個別の検討にとどまっているのが現状である。

飛鳥寺出土耳環は、昭和 32 年（1957）に飛鳥寺第三次発掘調査で他の舍利埋納物とともに検出された（奈良国立文化財研究所編 1958）。その発掘報告書中で、耳環は 23 点以上で中空のもの 1 点を含み、それ以外は銅芯とされたが、近年の奈良文化財研究所による飛鳥寺塔心礎出土品の再整理により、耳環は 29 点で、中空と報告されていた耳環は中実であることが判明した（石橋ほか 2017）。飛鳥寺の耳環は、顕微鏡観察、透過 X 線撮影、蛍光 X 線分析などの結果にもとづいて材質と製作技法により分類がおこなわれ、対となる資料の検討のほか、実測図も公表され、銀芯金張耳環については百済製の可能性も考慮すべきとされている（石橋ほか 2017、諫早 2025）。

四天王寺出土耳環は、昭和9年（1934）の室戸台風で倒壊した五重塔の地下に存在する飛鳥時代の塔心礎上より昭和10年に検出された（天沼編1936）。その発掘報告中で、耳環は金質の良い中空のもので、古墳出土資料との比較から飛鳥時代のもと考えられている（大脇1936）。その後は、筆者が飛鳥時代における年代的位置付けを検討しており（横田2018）、そのほかにも、蛍光X線分析と透過X線観察が実施され、銀と銅を約10%含む金製の中空耳環で、百濟地域出土資料との類似性が指摘されている（比佐ほか2025）。

中宮寺出土耳環は、昭和38年（1963）の第1次調査時に、塔心礎上より検出された（斑鳩町教育委員会編2013）。耳環を含む塔心礎上の出土品は、舍利が確認できないことから、地鎮的な性格を有する心柱埋納物の可能性が指摘されている（平田2013）。

尼寺廃寺出土耳環は、平成7年（1995）度の第10次調査時に、塔心礎上より検出された（香芝市二上山博物館編2003）。尼寺廃寺の耳環は、顕微鏡観察、透過X線撮影、蛍光X線分析などの結果にもとづいて材質と製作技法により分類がおこなわれ、対となる資料の検討もなされた（渡辺2003）。さらに筆者は、それらの年代推定も一部おこなっている（横田2018）。

各塔心礎出土耳環の研究史を概観すると、飛鳥寺、四天王寺、尼寺廃寺の資料は、科学的分析法にもとづいた材質の判定や分類がおこなわれているが、中宮寺の資料は、科学的分析法にもとづいた材質と構造による分類がなされていない。また、四天王寺と尼寺廃寺は、筆者が年代的位置付けにも言及してきたが、飛鳥寺の資料は、考古学的な指標により個別の年代的位置付けがなされておらず、中宮寺の資料も年代的位置付けがおこなわれていない。

そこで本稿では、上述の先行研究に加えて、筆者による寺院塔心礎出土全耳環の資料調査と蛍光X線分析の成果をふまえ、塔心礎出土耳環の分類と編年をおこない、そこから派生する耳環の問題について考察する。なお、分析使用機器は、オリンパス製携帯型蛍光X線分析計 VANTA で、分析メソッドは貴金属（Precious Metals）である。測定は対象より約1から3mm離し、測定箇所は対象の状態によりその都度変え、1点の測定時間は各10秒である。

寺院塔心礎出土耳環研究の意味 塔心礎出土資料は耳環に限らず、一括埋納された年代が定点となり、一括埋納品のなかでも最新資料の下限年代がおさえられるという点で、考古学的にきわめて重要な意味をもっている。また、寺院の造営主体者や氏族が想定されている場合、その埋納者がどのような材質の耳環を持っていたのかを知ることで、耳環の材質ごとの階層性の有無について、具体的に検証することも可能となるだろう。そのような重要性をもつ塔心礎出土耳環を材質と構造にもとづいて分類し、古墳や集落等出土資料との比較により編年することで、耳環全体の年代観の精確さを確認するとともに、逆に塔心礎出土耳環個々の階層性や年代を知ることにも繋がると思料する。本稿では、飛鳥寺から尼寺廃寺までの耳環を検討することで、いつどのような人々が耳環の埋納に関わったのかを示し、塔心礎に耳環を埋納するという行為が終焉した時期についても明らかにしたい。

1 寺院塔心礎出土耳環の分類

分類の前提 寺院塔心礎より出土した耳環は、現在判明しているもので、飛鳥寺 29 点、四天王寺 2 点、中宮寺 2 点、尼寺廃寺 12 点である。耳環の分類では、肉眼観察の重要性は当然のこととして、研究史的にもその材質や製作技法を知るための科学分析により得られた情報が、客観的な根拠にもとづく重要な指標となっている。そこで本稿では、科学分析にもとづく材質と製作技法判定と肉眼観察にもとづく構造推定により耳環の分類をおこなう。なお、耳環の法量や形状については、6 世紀には大きく 7 世紀には小さくなる点や、断面円形が古く断面楕円形が新しい点等が、研究史的に耳環の時代性を表す属性と考えられることから、次章の編年で述べることとする。

筆者が実施してきた寺院塔心礎以外出土耳環の蛍光 X 線分析結果からは、従来、「金無垢」や「純金」とされてきた耳環のなかにも、金と銀の合金と判明したものがある³⁾。本来、金無垢や純金とは、24 金 (24K) とも呼ばれ、金のみで構成された状態を指す言葉である。そのような金無垢の耳環は、大

阪府高井田山古墳出土例で確認できるが、ほかに存在しても少数であろう。また、銅芯金張、銅芯金箔張、銅芯金板貼などとされる耳環についても、芯の外面を覆う金で、金無垢のものは少なく、18金未満の金銀合金であることも、蛍光X線分析から判明することがある⁴⁾。そのような問題意識から、本稿では、金について蛍光X線分析のFP法⁵⁾より得られた半定量値を元に、金の品位をK（カラット）で表現した。FP法では、標準試料を使用した検量線法による精確な定量分析の信頼度には及ばないものの、考古学的な分析をおこなうために24分率法で品位を表すという行為には、感覚的に漠然と金とされてきた資料に客観的な指標を付す意味があると考えためである。

金と銀の合金製耳環で銅が検出されることは多くなく、検出されたとしても微量であることから、耳環が作られた古墳時代から飛鳥時代にかけて、銅は金と銀の合金に混合する金属としては一般的ではなかったと考えられる⁶⁾。そのため、銅芯金張耳環の場合で、外表材である金の品位を考える際には、表面より内部まで測定するという透過性のX線を用いる蛍光X線分析の特性⁷⁾により、芯材の銅を検出してしまうことがあるが、銅の半定量値は金の品位には含まないものとして計算した。なお、金の品位算定は、金の半定量値を金と銀の半定量値の和で割った商に24をかけた積による。例えば、積が19.5だった場合は、19から20Kのように幅をもたせる書き方にした。

飛鳥寺出土耳環（図2-1～29） 飛鳥寺からは、29点の耳環が出土している（石橋ほか2017）。筆者の蛍光X線分析と先行研究成果（石橋ほか2017）をつきあわせても、大きな差異は認められない。ただし、23の1点のみ、奈良文化財研究所の分析では銅芯となっているものの、筆者の分析（図1）では銅の他に水銀と金を検出したことから、銅芯鍍金耳環と判断した⁸⁾。本稿の分類では、内側から外側へと材の重なり順で、その名称を表す。貴金属使用量が多い順に分類すると、銀芯金張耳環1点、銅芯金張耳環5点、銅芯銀張鍍金耳環2点、銅芯鍍金耳環15点、銅耳環6点である。

銀芯金張耳環（12）は、銀の芯材に金を張り、「C」字形に曲げたもので、飛鳥寺以外に奈良県藤ノ木古墳から2点、奈良県平野塚穴山古墳から1点⁹⁾

が出土している。飛鳥寺の銀芯金張耳環の金品位は、筆者の機器では測定域の関係で銀が干渉することから算定できない。なお、藤ノ木古墳の銀芯金張耳環は、比佐陽一郎氏により総合的な検討がなされ、それに使用された金の品位についても注意が払われているものの、銀芯の影響などを考慮し、製作当時の様子を知ることは困難であるとされている（比佐2019）。

銅芯金張耳環（2、5、7～9）は、銅の芯材に22から24Kの金を張り、「C」字形に曲げたもので、類例は古墳時代から飛鳥時代まで数多く存在する。ただし、銅芯金張とされる全ての耳環が飛鳥寺出土例のように品位の高い金を使用しているわけではなく、18K未満の「金銀合金」を使用する例も数多いため、本稿では便宜的に18K以上と未満で区別し、銅芯金張と銅芯金銀合金張とを分けて考えておきたい。

銅芯銀張鍍金耳環（10、11）は、銅の芯材に銀を張り、「C」字形に曲げた後にアマルガム鍍金を施したもので、類例は古墳時代から飛鳥時代まで数多く存在する。古墳出土資料では、銅芯銀張鍍金耳環がもっとも多く出土するが、飛鳥寺では29点中2点と少ない。

銅芯鍍金耳環（1、3、4、6、13～23）は、銅の芯材を「C」字形に曲げた後にアマルガム鍍金を施したもので、類例は古墳時代から飛鳥時代まで多く存在する。大型首長墳の主たる被葬者の装身具には認められず、集落遺跡の竪穴建物からも多く出土することから、金を多く使う階層性上位の装身具ではないと考えられる。

銅耳環（24～29）は、銅の芯材を「C」字形に曲げたもので、当初は銅芯鍍金として作られたが、腐食等で鍍金膜が無くなったものも含まれる可能性がある。銅芯鍍金耳環と同様、大型首長墳の主たる被葬者の装身具には認められず、集落遺跡の竪穴建物からも出土することから、こちらも階層性上位の装身具ではないと考えられる。

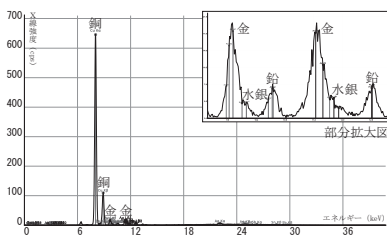


図1 飛鳥寺出土耳環23のスペクトル



図2 寺院塔心礎出土土耳環 (年代は6世紀第3四半期を6C3のように略記)

表1 寺院塔心礎出土耳環（単位は重量g、品位K、以外cm）

遺跡	番号	種別	高	幅	縦厚	横厚	重量	品位
飛鳥寺	1	銅芯鍍金	2.61	2.81	0.69	0.70	13.74	
	2	銅芯金張	2.73	3.03	0.70	0.70	12.79	23-24
	3	銅芯鍍金振り	2.80	2.95	0.62	0.59	10.60	
	4	銅芯鍍金振り	2.61	2.83	0.60	0.57	8.74	
	5	銅芯金張	2.55	2.81	0.62	0.62	6.15	22-23
	6	銅芯鍍金	2.53	2.90	0.67	0.65	13.90	
	7	銅芯金張	2.30	2.57	0.55	0.54	9.88	22-23
	8	銅芯金張	2.33	2.56	0.54	0.52	8.99	22-23
	9	銅芯金張	2.56	2.79	0.64	0.63	13.65	22-23
	10	銅芯銀張鍍金	2.63	2.85	0.55	0.53	6.01	
	11	銅芯銀張鍍金	2.60	2.85	0.55	0.50	7.58	
	12	銀芯金張	(1.99)	(2.38)	0.25	0.25	2.45	
	13	銅芯鍍金	3.03	3.34	0.83	0.85	5.64	
	14	銅芯鍍金	不明	不明	0.78	0.90	0.75	
	15	銅芯鍍金	2.50	2.77	0.63	0.68	16.06	
	16	銅芯鍍金	(2.30)	(2.56)	0.58	0.56	4.00	
	17	銅芯鍍金	2.53	2.80	0.58	0.55	7.05	
	18	銅芯鍍金	2.46	2.64	0.50	0.50	6.01	
	19	銅芯鍍金	(1.90)	(2.17)	0.48	0.48	2.82	
	20	銅芯鍍金	不明	(1.86)	0.33	0.33	0.80	
	21	銅芯鍍金振り	2.42	(2.52)	0.49	0.49	3.84	
	22	銅芯鍍金振り	2.37	(2.54)	0.49	0.49	4.51	
	23	銅芯鍍金	不明	不明	0.50	0.50	1.27	
	24	銅	不明	不明	0.45	0.45	1.60	
	25	銅	不明	不明	(0.5?)	(0.5?)	2.32	
	26	銅	不明	不明	(0.5?)	(0.5?)	4.31	
	27	銅	(2.03)	(2.64)	0.38	0.38	3.07	
	28	銅	不明	不明	(0.3?)	(0.3?)	0.76	
	29	銅	不明	不明	(0.2?)	(0.2?)	1.06	
四天王寺	30	銅管金張	2.00	2.25	0.45	0.45	0.81	21-22
	31	銅管金張	1.90	2.30	0.45	0.45	0.82	21-22
中宮寺	32	銅管金張	1.95	1.90	0.48	0.48	1.95	23-24
	33	銅管金張	1.80	1.90	0.48	0.48	1.32	23-24
尼寺廃寺	34	銅管金張	1.79	1.88	0.44	0.48	2.08	23-24
	35	銅芯金張	2.05	2.24	0.48	0.59	4.62	23-24
	36	銅芯金張	2.04	2.24	0.48	0.60	6.25	23-24
	37	銅芯金張	1.92	2.00	0.43	0.61	5.71	24
	38	銅芯金張	1.53	1.73	0.29	0.30	0.89	24
	39	銅芯金張	1.57	不明	0.31	0.31	0.96	24
	40	銅芯金張	1.70	1.78	0.35	0.50	1.89	24
	41	銅芯金張	1.78	1.91	0.43	0.64	4.46	24
	42	銅芯金張	2.05	2.27	0.50	0.68	6.53	23-24
	43	銅管金張	1.80	1.91	0.45	0.48	2.23	23-24
	44	銅芯金張	1.75	1.88	0.40	0.58	2.96	23-24
	45	銅管金張	1.42	1.47	0.27	0.35	0.54	23-24

四天王寺出土耳環（図2－30、31） 四天王寺からは、2点の耳環が出土している（天沼編 1936）。2点（30、31）は、ともに環体部の窪み方と近年の研究成果（比佐ほか 2025）により、従来の見解（大脇 1936）通り、内部は空洞と考えられる。筆者の蛍光X線分析では、2点とも金、銀、銅が検出された（図3）。そのなかで、銅については、先述の金銀合金に混合する金属として一般的でなかったと考えられる点、透過性のX線を用いる蛍光X線分析では表面より内部まで測定するという点から、検出された銅の多くは、21から22Kの金の裏側にあったと推定される銅管由来のものとも考えられる。

しかし、各2回計測した銅の半定量値は、30が6.41と9.60%、31が8.74と13.47%と差異が大きく、他の銅管金張耳環を測定した場合より5から10%ほど高い。金に銅と銀各10%程を含む合金薄板製耳環説（比佐ほか 2025）もあり、その場合は、19から20Kの金管耳環となる¹⁰⁾。筆者は、銅と銀を各10%含む金を張る耳環を知らず、判断は難しいが、暫定的に銅の管材に金を張り、「C」字形に曲げた銅管金張耳環に分類しておきたい。

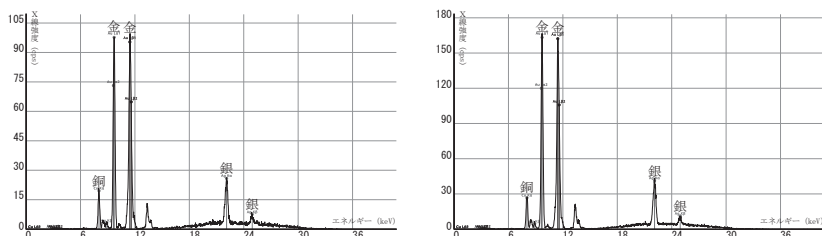


図3 四天王寺出土耳環のスペクトル（左30、右31）

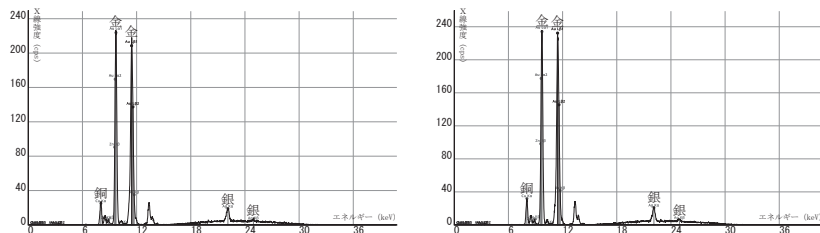


図4 中宮寺出土耳環のスペクトル（左32、右33）

ただし、銅管金張とした場合、中空耳環の多くは、通常環体部とは別作りの蓋で両端を閉じるため、端部を金で折りこんで閉じるその作り方は異例である。一般的な中空耳環と異なることや百済地域出土資料と類似することの指摘（比佐ほか 2025）に鑑みると、筆者による日本出土資料との比較では、その位置付けは難しい可能性があり、「考古学的な検討、考察については、機会を改め報告を行う予定」（比佐ほか 2025）とのことから、それに期待したい。なお、百済の王興寺では、蛍光 X 線分析の表面平均値で金 89.90 %、銀 1.52 %、銅 8.68 % の銅芯金張耳環と金 53.03 %、銀 45.73 %、銅 1.24 % の合金張耳環（国立扶余文化財研究所 2009）が、百済の弥勒寺では、金 99 % 以上で銀 1 % 未満の 9 点と金に銀 11.26 %、銅 1.17 % を含む耳環と金に銀 10.28 %、銅 3.07 % の耳環（国立文化財研究所 2014）が確認され、銀の値を見ると四天王寺出土耳環は、弥勒寺出土の銀を 10 % 以上含む耳環に近い。

中宮寺出土耳環（図 2 - 32、33） 中宮寺からは、2 点の耳環が出土している（斑鳩町教育委員会編 2013）。そのうち 1 点（32）は、端部の蓋が外れている箇所から、内部を観察することが可能であり、内部は空洞と確認できる。筆者の蛍光 X 線分析では、2 点とも金、銀、銅がそれぞれ検出された（図 4）。そのなかで、銅については、四天王寺出土耳環と同様に金の裏側にあると推定される銅管由来のものと考えておきたい。2 点（32、33）は、黒色部分も多く、肉眼による材質判定は困難だが、金の品位は 23 から 24K と高い。なお、1 点（33）の環体内側の金接合部には、緑青が滲む箇所があり、これが外部からの汚染でなければ、内部の銅管由来のものの可能性がある。

このような事実と推定により、中宮寺の耳環は、銅の管材に 23 から 24K の金を張り、「C」字形に曲げた銅管金張耳環に分類する。同じ銅管金張耳環でも、四天王寺のものと端部が異なり、環体部とは別作りの蓋で管両端を閉じ、その蓋の外縁部を外表の金で留めるという技法で作られている。このような別材の蓋を使う技法は、古墳時代から飛鳥時代まで広く認められるものである。分析結果と製作技法が 2 点に共通し、法量も近似することから、これら 2 点は対の関係にあったものと考えられる。

尼寺廃寺出土耳環（図2-34～45） 尼寺廃寺からは12点の耳環が出土している（香芝市二上山博物館編2003）。筆者の蛍光X線分析と先行研究成果（渡辺2003）をつきあわせても、大きな差異は認められない。ただし、検出された銅の解釈で、中空の資料にどのように関係するのかという点が異なる。渡辺智恵美氏は「銅については、元来金に含有されているのか、外部からの汚染によるものであるかは非破壊検査であるため判断できない」（渡辺2003）とし、中空耳環の銅の評価に慎重な姿勢を貫いている。本稿では、金と銀に銅を混ぜることが一般的ではなく、X線を照射する分析では表面より内部まで測定し、外表面金製の中空耳環で残存状況が良好なものは、内部より緑青が染み出し銅管が残ると推定される例が群馬県八幡観音塚古墳や大阪府田辺17号墳にもみられ、古墳時代から飛鳥時代の資料に存在することから、尼寺廃寺出土中空耳環は銅管金張として作られたが、内側の銅管は腐食によりほぼ残っていない状態と判断しておきたい。このような事実と推定により、尼寺廃寺の耳環は、銅芯金張耳環9点、銅管金張耳環3点に分類する。

銅芯金張耳環（35～42、44）は、銅の芯材に23から24Kの金を張り、「C」字形に曲げたもので、類例は古墳時代から飛鳥時代まで数多く存在するが、尼寺廃寺出土例のように、ほぼ純金を張る耳環だけがまとまって出土するという例は、古墳出土資料と比較してもきわめて少ない。

銅管金張耳環（34、43、45）は、銅の管材に23から24Kの金を張り、「C」字形に曲げたもので、中宮寺出土耳環と同様に環体部とは別作りの蓋で管両端を閉じ、その蓋の外縁部を外表の金で留めるという技法で作られている。中宮寺の耳環（32、33）と尼寺廃寺の耳環（34、43）は、その法量や金の品位、同一の製作技法といった顕著な共通性から、ほぼ同時期に同じ工房で作られた可能性が考えられる。

尼寺廃寺のように銅芯金張耳環・銅管金張耳環のみ出土した古墳群が、大阪府平尾山古墳群の雁多尾畑49支群である¹¹⁾。古墳出土耳環は8点で、中実も中空も22から24Kの品位が高い金を張るものに限られる点は尼寺廃寺と共通するが、法量の大きいものが含まれる点は異なっている。

小結 塔心礎出土耳環を分類した結果、飛鳥寺は銀芯金張、銅芯金張、銅芯銀張鍍金、銅芯鍍金、銅の5種であるのに対し、四天王寺は銅管金張（金管のみの可能性もある）の1種、中宮寺は銅管金張の1種、尼寺廃寺は銅芯金張と銅管金張の2種と種類が少ないことが明らかになった。ただし、種類こそ少ないものの、金張りに使われた金の品位に着目してみると、四天王寺は21から22K、中宮寺は23から24K、尼寺廃寺は23から24Kといずれも高く、飛鳥寺の銅芯銀張鍍金・銅芯鍍金・銅などの金を張らない、もしくは使われる金が少ない耳環と比較して、それらが持つ価値を示している。そうした耳環における貴金属使用量の割合という観点からは、飛鳥寺の銀芯金張耳環で、外部から見えない芯材にあえて銀を使用していることの意味が、階層性の問題ともかかわって重要である。

例えば、藤ノ木古墳の銀芯金張耳環を着けた北側被葬者と銅芯金張耳環を着けた南側被葬者では、耳環以外の装身具のほかにも威信財と考えられる鏡の枚数と大きさでも、北被葬者が直径21.6cmの画文帯神鏡を含む3面、南被葬者が直径17.9cmの獣帯鏡1面と差がみられる。また、どちらの被葬者の物かは不明であるが、出土した振り環頭大刀2振の振り部は、鉄地に金を張るという他に類を見ないものであり、銀芯金張という希少な耳環とともに貴金属の使用割合が階層性を示す例といえよう¹²⁾。振り環頭大刀の振り部は、岐阜県船来山272号墳のように、一見すると鉄だけでも鉄地錫張と推定されるもののほか、群馬県綿貫観音山古墳の鉄地銀張のものなどがあり、同じ振り環頭大刀のなかでも、拵えの構造だけでなく貴金属の使用割合が階層性を示している可能性がある。

以上のことから、材質と構造にもとづいて分類をおこなった塔心礎出土の耳環については、貴金属使用割合の多寡で階層性の高低が表されていると考えられる。ただし、耳環は古墳時代から飛鳥時代まで存在し、同じ分類の耳環であっても、年代が異なれば示す階層的位置付けが変わることもあり得る。そのため次章では、分類した塔心礎出土耳環の年代的な位置付けをおこない、それぞれの耳環がどのような編年の位置にあるのかを示したい。

2 寺院塔心礎出土耳環の編年

編年の前提 耳環は長らく編年が難しい資料と考えられ、実際分類にもとづいた体系的な編年案は示されてこなかった。その要因としては、以下のよう
な研究上の障害が考えられる。まず、耳環は一見して同様の形状のものが
多く、とくに報告書の実測図だけを見ても、その材質や細部の構造はほぼ
不明である。また、法量についても、小縮尺で掲載された実測図では、複
数の耳環が並んでいても相違が不明瞭である。さらに、耳環は6世紀に大き
く、7世紀に小さくなり、特定の時期の耳環は特定の法量であること（横田
2018）を指摘してきたものの、例えば6世紀の幅2.5 cmの銅芯金張耳環と7
世紀の幅2.5 cmの銅芯金張耳環が存在していることなどから、法量による時
期判定が難しいのではないかという疑問が生じたとしても不思議はない¹³⁾。

しかし、上述の編年研究をするうえでの問題点は、材質や細部構造の解明
に蛍光X線分析やX線CT観察といった科学的手法と肉眼観察を併用するこ
とや、ある属性（例えば環体の法量）が同じ場合であっても他の属性（例え
ば断面の形状）も確認することなどで解決することが十分に可能である。

本稿では、まず年代の基準資料¹⁴⁾を提示し、基準資料と同法量の耳環が
どの程度の時間幅をもって出土するのか、重要な属性となる断面形状の変化
も検討してから法量と形状で編年をおこなう。法量と形状を重視するのは、
材質分類で、銀芯金張と銅芯金張のように異なるものでも、同時期に葬られ
た被葬者の耳環ではほぼ同法量となることが、藤ノ木古墳の北側被葬者と南
側被葬者の例などから知られるためである。

基準資料の検討では、九州に多い金製細型耳環のような特例を除き、耳環
は地域を超えて銅芯内部の空隙等の製作技法痕跡やヒ素を多く含む銅といっ
た不可視属性の共通性が認められることから、出土地域を限らないでおく。

基準資料の検討 塔心礎出土耳環と関係する6世紀から7世紀までの耳環
について年代順に検討する¹⁵⁾。

6世紀第1四半期の基準資料には、群馬県前二子古墳出土金銀合金耳環（14-17K）があり、それと同じ法量で5世紀第4四半期に遡るものではなく、6世紀第2四半期の大阪府小白髪山古墳からも同程度法量の金耳環（21-22K）が出土している。6世紀第2四半期の基準資料には、兵庫県勝福寺古墳前方部南棺出土金銀合金耳環（15-16K）があり、それと同じ法量で6世紀第1四半期に遡るものではなく、6世紀第3四半期の愛媛県正光寺山1号墳からも同程度法量の耳環が出土している。6世紀第3四半期の基準資料には、京都府物集女車塚古墳出土銀芯鍍金耳環があり、それと同じ法量で6世紀第2四半期に遡るものではなく、7世紀第1四半期の奈良県牧野古墳からも同程度法量の銅芯金張耳環が出土している。6世紀第4四半期の基準資料には、奈良県藤ノ木古墳出土銀芯金張耳環・銅芯金張耳環があり、それらと同じ法量で6世紀第3四半期に遡るものではなく、7世紀第2四半期の奈良県龍王山D1号墳からも同程度法量の中空耳環が出土している。

7世紀第1四半期の基準資料には、兵庫県箕谷2号墳出土の断面楕円形銅芯銀張鍍金耳環があり、それと同じ法量で6世紀第4四半期に遡るものではなく、7世紀第3から第4四半期の大阪府平尾山古墳群雁多尾畑49支群2号墳からは環体幅2.4cmと箕谷2号墳より小さい銅管金張耳環（24K）が出土している。7世紀第2四半期の基準資料には、奈良県大正池南1号墳出土の断面楕円形耳環があり、それと同じ法量で7世紀第1四半期に遡るものではなく、7世紀第3四半期の雁多尾畑49支群7、8号墳からも本体がほぼ同じ法量で、断面円形の銅芯金張耳環（22-23K）が出土している。7世紀第3四半期の基準資料には、雁多尾畑49支群4号墳出土銅管金張耳環（24K）があり、それと同じ法量で7世紀第2四半期に遡るものではなく、飛鳥Ⅳの須恵器が出土した7世紀第4四半期の雁多尾畑49支群10号墓からも同程度法量の耳環が出土している。7世紀第4四半期の基準資料には、千葉県諏訪台古墳群SM1060出土耳環があり、それと同じ法量で7世紀第3四半期に遡るものではなく、8世紀第1四半期頃に廃絶した宮城県西台畑遺跡SI138からも同程度法量の耳環が出土している。

6世紀から7世紀までの耳環を年代順にみていくと、ある時期に出現した特定法量の耳環は、長いもので第1四半期から第3四半期までのように、須恵器型式で3型式期の時間幅をもって出土し、1型式期を25年とした場合、4型式期以上のものは存在しない。そのことについては、宮穴横穴群出土耳環の検討でも述べた通りである（横田2018）。基準資料を含む耳環の資料調査と上述の検討を重ねた現在では、そうした現象の存在はほぼ間違いないものと考えている。また、特定法量の耳環が時間幅をもつことの意味については、かつて着装者の年齢が関係していると推測した（横田2018）。もし耳環に長期伝世するものがあるとすれば、ある時間幅に特定法量の耳環が収まるという現象は起こりにくく、ピアス式の太い耳環を閉じた場合、外すことには困難を伴うため、耳環は基本的に伝世しない装身具と考えておきたい¹⁶⁾。

耳環の断面形状 基準資料にもみられる楕円形断面について、7世紀に断面楕円形の耳環が増加するという傾向は、すでに多くの研究で述べられた通りであるが、雁多尾畑49支群7号墳、8号墳出土耳環のように円形の断面形状が一定数見られることも注意すべき現象と考える。耳環の断面縦厚に対して断面横厚の法量が大きくなる楕円形化は、6世紀第4四半期には始まることから、静岡県天王ヶ谷13号横穴出土の本体幅3cmを超える耳環などから明らかであるが、楕円形化の理由については、まだ明瞭な答えが出されていない。

なお、吉田英敏氏は、船来山古墳群出土耳環の分析のなかで、断面楕円形の耳環について、円形の金属棒に巻きつけるには、断面楕円形の材の方が容易であるとして、楕円形断面と耳環の量産体制を関連付けている（吉田1999）。しかし、7世紀中葉以降の環体幅が小さく断面楕円形化が著しく太い資料の場合は、むしろ巻き付け加工は困難で、断面円形で細い方が加工は容易ではないかと思われる。実際、断面の縦厚と横厚の比率が2対3から1対2程の断面楕円形化が著しい耳環も多く存在する¹⁷⁾。7世紀中葉以降になると、断面楕円形の耳環に加えて、断面楕円形耳環より細い円形断面のものが一定数認められ、今後の検討を要する。以下では、これまでの基準資料と断面形状の検討をもとに、塔心礎出土耳環を編年する。

飛鳥寺出土耳環（図2-1～29） 飛鳥寺出土耳環について、基準資料との対比から年代順に述べる。銀芯金張（12）は断面円形で、本来の幅は2cmを少し超える程度と推測され、6世紀第2四半期の基準資料である兵庫県勝福寺古墳前方部南棺出土金銀合金耳環より環体が大きく、6世紀第3四半期の基準資料である京都府物集女車塚古墳出土銀芯鍍金耳環より環体が小さく断面も細いものであることから、6世紀第3四半期の資料と考えられる¹⁸⁾。

銅芯金張（7、8）、銅芯銀張鍍金（10、11）、銅芯鍍金（16～20）はいずれも断面円形で、6世紀第2四半期の基準資料である勝福寺古墳前方部南棺出土金銀合金耳環より環体も断面も大きく、6世紀第3四半期の基準資料である物集女車塚古墳出土銀芯鍍金耳環と同程度かやや大きいものと小さいものがあること、いずれも断面縦厚と横厚が0.6cmを超えず、6世紀第4四半期の基準資料である奈良県藤ノ木古墳出土銀芯金張耳環、銅芯金張耳環より大幅に環体が小さく断面も細いものであることから、いずれも6世紀第3四半期のなかに収まる資料と考えられる。銅芯鍍金のうち、振り環体耳環（21、22）も、6世紀第3四半期の基準資料である物集女車塚古墳出土銀芯鍍金耳環と同程度の法量であることから、これらも6世紀第3四半期のなかに収まる資料と考えられる。

銅芯金張（2、5、9）、銅芯鍍金（1、6、13、15）はいずれも断面円形で、6世紀第3四半期の基準資料である物集女車塚古墳出土銀芯鍍金耳環より環体も断面も大きく、いずれも断面縦厚と横厚が0.6cmを超えること、6世紀第4四半期の基準資料である藤ノ木古墳出土銀芯金張耳環、銅芯金張耳環よりは小さいことから、いずれも6世紀第4四半期の資料と考えられる。銅芯鍍金のうち、振り環体耳環（3、4）も、6世紀第3四半期の基準資料である物集女車塚古墳出土銀芯鍍金耳環より環体も断面も大きく、断面縦厚が0.6cmを超えることから、これらも6世紀第4四半期の資料と考えられる。なお、破片や欠損が大きい銅芯鍍金（14、23）、銅（24～29）は、本来の環体幅などが不明なため、判断が難しいものの、推定の断面法量から6世紀第4四半期の銅芯鍍金（14）以外、6世紀第3四半期と考えておく。

四天王寺出土耳環（図2－30、31） 四天王寺出土耳環について、基準資料との対比から年代を考える。2点の銅管金張（30、31）は断面円形で、7世紀第1四半期の基準資料で断面楕円形の兵庫県箕谷2号墳出土銅芯銀張鍍金耳環より環体も断面も小さく、7世紀第2四半期の資料で断面円形の大阪府雁多尾畑49支群7、8号墳出土銅芯金張耳環と同程度の法量で、7世紀第3四半期の基準資料で断面楕円形の雁多尾畑49支群4号墳出土銅管金張耳環より環体が大きいことから、7世紀第2四半期の資料と考えられる¹⁹⁾。

中宮寺出土耳環（図2－32、33） 中宮寺出土耳環について、基準資料との対比から年代を考える。2点の銅管金張（32、33）は断面円形で、7世紀第2四半期の基準資料で断面楕円形の奈良県大正池南1号墳出土耳環より環体も断面も小さく、7世紀第3四半期の基準資料で断面楕円形の雁多尾畑49支群4号墳出土銅管金張耳環と同程度の法量で、7世紀第4四半期の基準資料で断面楕円形の千葉県諏訪台古墳群 SM1060 出土耳環より環体も断面も大きいことから、7世紀第3四半期の資料と考えられる。

尼寺廃寺出土耳環（図2－34、45） 尼寺廃寺出土耳環について、基準資料との対比から年代順に述べる。銅芯金張（35、36、42）は、いずれも断面楕円形で、7世紀第1四半期の基準資料で断面楕円形の箕谷2号墳出土銅芯銀張鍍金耳環より環体も断面も小さく、7世紀第2四半期の基準資料で断面楕円形の大正池南1号墳出土耳環と同程度の法量で、7世紀第3四半期の基準資料で断面楕円形の雁多尾畑49支群4号墳出土銅管金張耳環より環体も断面も大きいことから、7世紀第2四半期の資料と考えられる。

銅芯金張（37～41、44）、銅管金張（34、43）は、断面楕円形（37、40、41、44）と断面円形（34、38、39、43）のものがあ、いずれも7世紀第2四半期の基準資料で断面楕円形の大正池南1号墳出土耳環より環体も断面も小さく、7世紀第3四半期の基準資料で断面楕円形の雁多尾畑49支群4号墳出土銅管金張耳環の環体と同程度かやや小さい法量で、7世紀第4四半期の基準資料で断面楕円形の諏訪台古墳群 SM1060 出土耳環より環体が大きいことから、いずれも7世紀第3四半期のなかに収まる資料と考えられる。

銅管金張（45）は、断面楕円形で、7世紀第3四半期の基準資料で断面楕円形の雁多尾畑49支群4号墳出土銅管金張耳環より環体も断面も小さく、7世紀第4四半期の基準資料で断面楕円形の諏訪古墳群SM1060出土耳環と同程度の法量であることから、7世紀第4四半期の資料と考えられる。

耳環以外からの検証 ここまで、塔心礎出土耳環について、材質と構造により個別に分類されたそれらの年代的位置付けを、法量と形状により考察してきた。つづいて、耳環以外の遺物や遺構、文献史料といった別の観点からも、これまでの位置付けに矛盾はないか検証したい。

まず、飛鳥寺塔心礎出土耳環は、6世紀第3四半期から第4四半期の資料としたが、『日本書紀』推古元年（593）に「仏の舍利を以て、法興寺の刹の柱の礎の中に置く」とあり、29点全てにおいて、593年に埋納されたものと考えても矛盾はない。つぎに、四天王寺塔心礎出土耳環は、7世紀第2四半期の資料としたが、四天王寺創建期の瓦を生産した楠葉平野山窯跡群（八幡市教育委員会編1985）のうち、3号窯より7世紀第2四半期の杯Gが出土していることや四天王寺創建期軒丸瓦の年代とも合致しており、7世紀第2四半期に埋納されたものと考えても矛盾はない。そして、中宮寺塔心礎出土耳環は、7世紀第3四半期の資料としたが、中宮寺の創建は単弁蓮華文軒丸瓦の年代より7世紀前半頃とされ（斑鳩町教育委員会編2013）、中宮寺創建瓦の年代とそこから出土した耳環とでは年代に矛盾がある。ただし、中宮寺創建瓦の年代は7世紀前半だとしても、塔心礎掘方より7世紀第3四半期の杯Gが出土していることから、伽藍の整備過程において塔の建立が金堂などよりも遅れた可能性が考えられる。塔が7世紀後半に造られたものであれば、耳環の年代とも矛盾はない。さいごに、尼寺廃寺塔心礎出土耳環は、7世紀第2四半期から第4四半期の資料としたが、尼寺廃寺塔跡の瓦は坂田寺式軒丸瓦の年代観から670年代頃と考えられ（小笠原2000、山下2003）、飛鳥Ⅲ期末の7世紀第4四半期に埋納されたものと考えても矛盾はない。

以上のことから、寺院塔心礎出土耳環で検討してきた実年代の措置について、妥当性があることが明らかになった。

小結 編年の結果、飛鳥寺の耳環は6世紀第3四半期から第4四半期、四天王寺の耳環は7世紀第2四半期、中宮寺の耳環は7世紀第3四半期、尼寺廃寺の資料は7世紀第2四半期から第4四半期とそれぞれ位置付けられた。材質と構造による分類と法量と形状による編年の結果を合わせると、飛鳥寺出土耳環は6世紀第3四半期の銀芯金張1点、銅芯金張2点、銅芯銀張鍍金2点、銅芯鍍金8点、銅6点、6世紀第4四半期の銅芯金張3点、銅芯鍍金7点、四天王寺出土耳環は7世紀第2四半期の銅管金張（金管の可能性もある）2点、中宮寺出土耳環は7世紀第3四半期の銅管金張2点、尼寺廃寺出土耳環は7世紀第2四半期の銅芯金張3点、7世紀第3四半期の銅芯金張6点、銅管金張2点、7世紀第4四半期の銅管金張1点である（図5）。

形式 様式	銀芯金張	銅芯金張	銅管金張	銅芯銀張鍍金	銅芯鍍金	銅
6世紀 第1四半期				※型式概念は破線で囲まれた部分		
6世紀 第2四半期						
6世紀 第3四半期	飛鳥寺 (12)	飛鳥寺 (7, 8)		飛鳥寺 (10, 11)	飛鳥寺 (16-23)	飛鳥寺 (24-29)
6世紀 第4四半期		飛鳥寺 (2, 5, 9)			飛鳥寺 (1, 3, 4, 6, 13-15)	
7世紀 第1四半期						
7世紀 第2四半期		尼寺廃寺 (35, 36, 42)	四天王寺 (30, 31)			
7世紀 第3四半期		尼寺廃寺 (37-41, 44)	中宮寺 (32, 33) 尼寺廃寺 (34, 43)			
7世紀 第4四半期			尼寺廃寺 (45)			

図5 寺院塔心礎出土耳環の編年の位置（寺院名下の括弧内数字は図2・表1と対応）

3 寺院の造営主体と塔心礎出土耳環の階層性

上述の分類と編年からは、寺院塔心礎出土耳環の材質と年代が明らかとなった。それらの耳環と寺院を比べた際、年代的に整合することもこれまでの検討より明瞭となったため、塔心礎出土耳環と寺院造営主体の階層性との関係についても考察を加えたい。

まず、飛鳥寺は『日本書紀』などの記述から、大臣である蘇我馬子の発願により建立された。大臣という高位の人物が建立した寺院から、銀芯金張耳環という希少な耳環が出土していることは、造営主体として蘇我氏を想定しても矛盾ないものと言える。銅芯金張耳環、銅芯銀張鍍金耳環、銅芯鍍金耳環、銅耳環についても、造営氏族が想定される岩橋千塚古墳群などにおいては、貴金属の使用量が多い耳環だけでなく、飛鳥寺のように様々な耳環が出土することから、氏族内の階層性を反映したものとも考えられる。

つぎに、四天王寺は『日本書紀』の記述から、厩戸皇子の発願により建立されたことが知られる。その耳環は、中空耳環のなかでも開口部の閉じ方が特徴的な希少品で金の品位も高く、厩戸皇子を中心とした上宮王家を造営主体者と考えても階層性に矛盾はない。

そして、中宮寺は『日本書紀』に創建記録はなく、後の『聖徳太子伝暦』には厩戸皇子の母、穴穂部間人皇后の宮を皇后崩御後に寺としたと記され、さらに後に穴穂部間人皇后が中宮寺の発願者という説も生まれる（大橋 2001）。それらの所伝は、後代に付加された可能性があり、当否不明であるが、厩戸皇子発願の法隆寺と同範瓦が出土しており、法隆寺との位置からも上宮王家が創建に関与した寺院であると考えられる。ただし、厩戸皇子の子、山背大兄王は『日本書紀』皇極天皇2年（643）に蘇我入鹿により滅ぼされるため、中宮寺の7世紀第3四半期の耳環は、上宮王家滅亡後に上宮王家の親縁が納めたものとも考えられる。中宮寺の耳環は、金の品位が非常に高く、上宮王家ないしその親縁を造営主体と考えても階層性に矛盾はない。

残る尼寺廃寺については、北廃寺と南廃寺と合わせて「般若寺」とする説（山下 2003）のほか、北廃寺を「弘道寺」、南廃寺を「般若寺」と分けて考える説（吉川 2022）などがある。その造営主体についても、敏達天皇系王族（山下 2003、吉川 2022 など）、蘇我氏ないし上宮王家と関わりが深い氏族（東野 2009）、紀氏（小笠原 2000）など諸説あり、敏達天皇系王族説のなかでも茅渟王一族とみる説（山下 2003）と茅渟王の子である斉明天皇が南廃寺を造営し、その子孫が事業を継承したとみる説（吉川 2022）などがある。これらのうち、上宮王家説は上宮王家滅亡と北廃寺創建年代の乖離が問題となり、蘇我氏説や紀氏説は、尼寺廃寺出土耳環 12 点全てに品位の非常に高い金を使っている点が、先述の蘇我氏創建の飛鳥寺出土耳環群や紀氏の奥津城と考えられる岩橋千塚古墳群出土耳環群（石丸ほか 2021）の多様さと全く異なり、違和感がある。そのため、表面に品位の高い金を使った耳環のみ 12 点を納めた尼寺廃寺は、造営主体者として敏達天皇系王族を想定する方が他説よりも蓋然性が高く、耳環の階層性とも矛盾はないものと思料する。

それと関連して、尼寺廃寺より 1km ほど離れた平野塚穴山古墳は、その位置から尼寺廃寺との有機的な繋がりが想定され、7 世紀中頃の銀芯金張耳環が出土している。同墳は、凝灰岩貼石や横口式石槨の規模と構造から見た場合、被葬者が高位であることは明白で、尼寺廃寺との関係も推測される同墳から銀芯金張という希少な耳環が出土していることも、尼寺廃寺の造営主体として敏達天皇系王族を想定することの一助になると考える。

おわりに

これまでの考察を通じて、寺院塔心礎出土耳環は、材質と構造にもとづいた分類により階層性が、法量と形状にもとづいた編年により時代性が、それぞれ明らかとなった。耳環は多様な法量のものを同時期に作成するのではなく、一定の法量のものを様々な材質や構造で製作したことを示した。そこからの考察により、塔心礎出土耳環には飛鳥寺のように多数出土した場合、資

料群には時期幅があり、階層的にも様々な耳環があることや、想定される造営主体とも塔心礎出土耳環の階層性は矛盾しないことが明らかとなった。

さいごに、飛鳥時代の初めに出現した、寺院塔心礎に耳環を埋納する行為が終焉を迎える時期について述べ、本稿のまとめに代えたい。滋賀県崇福寺跡は、天智天皇によって天智天皇7年（668）に建立された崇福寺²⁰⁾と一般的に考えられている。その塔心礎からは、舍利容器、舍利瓶、水晶、玉、鏡、無文銀銭など多くの埋納品が出土した。このうち、無文銀銭は、『日本書紀』天武天皇12年（683）に「今より以後、必ず銅銭を用いよ。銀銭を用いること莫れ」とあるなかの銀銭に該当すると考えられ（内田1921）、崇福寺の塔心礎埋納物は、この無文銀銭の存在から668年から683年の間に埋納されたと考えるのが妥当である²¹⁾。耳環出土寺院のなかで最も新しいものが7世紀第4四半期の尼寺廃寺で、668年から683年の間に埋納された崇福寺塔心礎に耳環はないことから、寺院塔心礎に耳環を埋納するという行為は、耳環自体の製作とともに、7世紀第3四半期から第4四半期にかけての飛鳥Ⅲ期、すなわち天智・天武朝に終焉を迎えたと考えられる。耳環の製作終了とほぼ同時期に建立された崇福寺塔心礎で耳環が出土しない意味としては、短期間で装身が大きく変化した画期の存在を指摘できよう。

[註]

- 1) 定林寺では金銅環が出土しており、石田茂作氏は「尚、塑像残片と共に、只一個ではあるが金銅環の出土した事も甚だ注目すべきことで、昭和三十一、二年度に調査された飛鳥寺の塔心礎上から、金環二十三個が発見された事と思ひ合わさるべきである。」（石田1964）と述べている。この金銅環を奈良国立博物館にて実見したところ、長さ約2cm、幅約1cm、厚さ約0.5cmの直方体と高さ約2cm、幅約2.5cm、厚さ約0.8cmの楕円形環が接合したような遺物で、耳環ではなかった。
- 2) 飛鳥寺は鎌倉時代の建久年間に落雷による火災のため舍利等を再埋納されたことが知られるが、明らかに鎌倉時代の舍利容器、舍利容器外箱、土師器皿を除いては、飛鳥時代の埋納品と考えて大過ないと思われる（諫早2025）。
- 3) 報告書では純金製とされる群馬県前二子古墳出土耳環2点（前橋市教育委員会文

化財保護課編 1993) は、蛍光 X 線分析の半定量値より金の品位を算出すると、1 点が 14 から 15K、もう 1 点が 16 から 17K であった。

- 4) 例えば、熊本県宮穴横穴群出土銅芯金銀合金張耳環(計測No 81)は 13 から 14K、新潟県鹿伏出土銅芯金銀合金張耳環(計測No 177)は 13 から 14K、鹿伏出土銅芯金銀合金張耳環(計測No 178)は 14 から 15K である。なお、報告時の数値は金と銀以外の元素も含んだ値から算出しており、本稿と異なる(横田 2025a)。
- 5) FP 法(Fundamental Parameter Method)とは、理論的に蛍光 X 線強度を計算し、対象物に近い元素組成をもつ標準試料を用いなくて、元素濃度(元素含有率)を求める演算方式である。対象物の元素組成が不明な状態で、非破壊・非接触で元素組成を調べることができるが、複数の金属素材から成る耳環のような遺物を分析する際には、得られた半定量値の取り扱いに注意が必要である。
- 6) 例えば、大阪府小白髪山古墳出土金耳環から検出された元素(横田 2025a)には、金・銀・鉄があるが、鉄は耳環と関係ないものである。兵庫県勝福寺古墳出土金銀合金耳環 2 点のうち、1 点からは金・銀が、もう 1 点からは金・銀・鉄が検出されたが、鉄は耳環と関係ないものである。これらのように銅が検出されない例から、金と銀の合金には基本的に銅を混ぜないと考える。村上隆氏によれば「古代の金製品は、いずれも金以外には銀を含んでおり、銅の含有は微量である場合がほとんど」(村上 2003) とのことである。
- 7) 蛍光 X 線分析には、透過性のある X 線を照射して試料内の元素から生じた特性 X 線(蛍光 X 線)のエネルギーを検出するエネルギー分散型蛍光 X 線分析(ED-XRF もしくは EDX)、X 線を照射して試料内の元素から生じた特性 X 線の波長を検出する波長分散型蛍光 X 線分析(WD-XRF もしくは WDX)の 2 種がある。EDX には、走査電子顕微鏡(SEM)から電子線を照射して試料表面の元素から生じた特性 X 線のエネルギーを検出する SEM-EDX もある。
- 8) 水銀と金については、塔心礎に埋納された他の遺物からの微細な鍍金膜の付着などによる可能性もあるが、肉眼では確認できなかった。
- 9) この耳環は、従来銅芯金張とされてきた(奈良県立橿原考古学研究所編 1977)が、筆者による資料調査で、銀芯金張の可能性が判明したため、本稿では銀芯金張耳環として記しておく。
- 10) 金管耳環の可能性のあるものの例としては、奈良県ハミ塚古墳出土資料が挙げられる(奈良県立橿原考古学研究所編 2003)。それは四天王寺の耳環と同じく、開口部を折り込んで閉じる構造で、土らしき物質が内部に残り、蜜蝋のような有機物を芯にした可能性も考えられる。ただし、一見して銅管がない金管の耳環でも、内側から銅管の痕跡として銅が検出されることがある。
- 11) 雁多尾畑 49 支群の古墳からは 8 点、古墓の 10 号墓からは 1 点の耳環が出土している(柏原市教育委員会編 1989)。

- 12) 藤ノ木古墳からは、銀地鍍金の梔子形空玉 54 点、大型空丸玉 24 点、小型空丸玉 47 点、有段空玉 48 点、空勾玉 127 点なども出土している(奈良県立橿原考古学研究所編 1993b)。金属製玉類は銀だけで鍍金が施されない物が圧倒的に多く、銀地鍍金は希少である。そうしたなかで、藤ノ木古墳出土品は質と量が驚異的であり、これらだけを見ても被葬者の身位の高さを窺い知ることができる。
- 13) 銅芯金張耳環は、6 世紀と 7 世紀だけでなく、5 世紀にも静岡県五ヶ山 B-1 号墳出土耳環(浅羽町教育委員会編 1993)のように存在し、実測図を見ただけでは、それらの違いが不分明である。ただし、実物を観察してみると、五ヶ山 B-1 号墳出土耳環の断面形は隅丸方形で、6・7 世紀の耳環には類例がなく、それらとの違いは明瞭であることから、実物を観察することが何よりも重要と考える。
- 14) 基準資料には、年代の指標となる土器を主に判断の基準とした。土器の出土がない場合には、他の遺物や遺構から年代を判断した。
- 15) 本稿では、6 世紀第 1 四半期から 7 世紀第 4 四半期までを、MT15、TK10、MT85、TK43、飛鳥Ⅰ古、飛鳥Ⅰ新、飛鳥Ⅱ、飛鳥Ⅲの土器で、四半期ごとに区分した年代観を用いる。前稿では、「飛鳥Ⅱ期とⅢ期のものを分けられる可能性」(横田 2018)を指摘した。その後の検討より本稿では、飛鳥Ⅱを 7 世紀第 3 四半期、飛鳥Ⅲは 7 世紀第 3 から第 4 四半期だが、便宜的に第 4 四半期とする。
- 16) 愛媛県播磨塚古墳では、6 世紀第 1 四半期の耳環が 6 世紀第 2 四半期の耳環と組み合わせられている。これなどは、6 世紀第 1 四半期に耳環を着けていた故人の耳環を、6 世紀第 2 四半期に受け継いだ例となる可能性もある。
- 17) 例えば、断面が 2 対 3 程のものは大阪府雁多尾畑 49 支群 3 号墳、断面が 1 対 2 程のものは千葉県諏訪台古墳群 SM1022 などで認められる。
- 18) 百濟製の可能性も考慮すべきという指摘(石橋ほか 2017)に鑑みると、筆者による日本出土資料との比較では、位置付けは難しいかもしれないが、本稿では日本で作られた可能性も考え、他と同じように比較しておく。
- 19) 分類の場合と同様、百濟地域出土資料と類似することの指摘(比佐ほか 2025)に鑑みると、筆者による日本出土資料との比較では、位置付けは難しいかもしれないが、本稿では日本で作られた可能性も考え、他と同じように比較しておく。
- 20) 『扶桑略記』の記述「七年戊辰正月十七日。於近江國志賀郡建崇福寺」による。
- 21) 683 年以降の無文銀錢使用を否定するものではなく、天皇発願寺院での宗教儀礼行為において、あえて禁を犯すということはないのではないかと考える。

〔参考文献〕

浅羽町教育委員会編 1993『五ヶ山 B-1 号墳』

網干善教 1958「御所市櫛羅 大正池南第一号墳、第二号墳及び火葬墓」『奈良県文化財調

査報告 第2集』奈良県教育委員会

天沼俊一編 1936『四天王寺図録 伽藍編』四天王寺

斑鳩町教育委員会編 2013『史跡中宮寺跡発掘調査報告書』

諫早直人 2025「飛鳥寺塔心礎埋納品の考古学」『京都府立大学考古学論集—考古学研究
室30周年記念』京都府立大学文学部歴史学科

石田茂作 1964「定林寺」『飛鳥』近畿日本叢書第3冊、近畿日本鉄道

石橋茂登・諫早直人・降幡順子 2017「飛鳥寺塔心礎出土耳環」『奈良文化財研究所紀要
2017』

石丸 彩・岩本 崇・金澤 舞・瀬谷今日子・中西瑠香・仲原知之・馬場彩加「和歌
山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群出土品について(2)」『紀州経済史文化史研究所紀
要』第42号、和歌山大学紀州経済史文化史研究所

市原市教育委員会埋蔵文化財調査センター編 2015『市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡
Ⅱ』

内田銀藏 1921『日本経済史の研究』同文館

大阪大学勝福寺古墳発掘調査団編 2007『勝福寺古墳の研究』

大橋一章 2001「中宮寺の創立について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第46輯第3
分冊

大脇正一 1936「地下心礎上発見の金環 解説」『四天王寺図録 伽藍編』四天王寺

小笠原好彦 2000「同範・同形式軒瓦からみた尼寺廃寺の性格と造営氏族」『日本考古学』
第10号、日本考古学協会(小笠原好彦 2005『日本古代寺院造営氏族の研究』東京
堂出版に「尼寺廃寺の性格と造営氏族」として再録)

香芝市二上山博物館編 2003『尼寺廃寺Ⅰ』香芝市教育委員会

柏原市教育委員会編 1989『平尾山古墳群—雁多尾畑49支群発掘調査概要報告書—』

黒板勝美編 1932『新訂増補国史大系 第12巻 扶桑略記 帝王編年記』吉川弘文館
国立扶余文化財研究所 2009『王興寺址Ⅲ』

国立文化財研究所 2014『益山弥勒寺石塔舍利荘厳』

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野 晋校注 1965『日本書紀 下 日本古典文学大
系68』岩波書店

滋賀県編 1974『滋賀県史蹟調査報告』第10冊、名著出版

静岡県埋蔵文化財センター編 2012『森町円田丘陵の横穴墓群』

仙台市教育委員会編 2016『西台畑遺跡第9次調査』

磚柳墳研究会編 1994『舞谷古墳群の研究』磚柳墳研究会

東野治之 2009「片岡王寺と尼寺廃寺」『文化財学報』第27集、奈良大学文学部文化財学
科

徳田誠志 2001「清寧天皇 河内坂門原陵飛地い号境界線保護工事予定区域の事前調査」
『書陵部紀要』第52号、宮内庁書陵部

- 奈良県立橿原考古学研究所編 1977『竜田御坊山古墳』奈良県教育委員会
- 奈良県立橿原考古学研究所編 1987『史跡牧野古墳』広陵町教育委員会
- 奈良県立橿原考古学研究所編 1993a『龍王山古墳群』奈良県教育委員会
- 奈良県立橿原考古学研究所編 1993b『斑鳩藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 奈良県立橿原考古学研究所編 2003『ハミ塚古墳』
- 奈良国立文化財研究所編 1958『飛鳥寺発掘調査報告』
- 新居浜市教育委員会編 2012『正光寺山古墳群』
- 比佐陽一郎 2019「藤ノ木古墳出土耳環の復元製作について」『文化財と技術』第9号、工芸文化研究所
- 比佐陽一郎・河合由里絵・渡邊慶一郎・諫早直人 2025「四天王寺塔心礎出土耳環の保存科学的調査」『日本文化財科学会第42回大会研究発表要旨集』
- 平田政彦 2013「塔心礎上面出土品について」『史跡中宮寺跡発掘調査報告書』斑鳩町教育委員会
- 前橋市教育委員会文化財保護課編 1993『前二子古墳』
- 向日市教育委員会編 1988『物集女車塚古墳』向日市教育委員会
- 村上 隆 2003『日本の美術』第443号 金工技術、至文堂
- 山下隆次 2003「考察」『尼寺廃寺Ⅰ』香芝市教育委員会
- 八幡市教育委員会編 1985『平野山瓦窯跡発掘調査概報』
- 八鹿町教育委員会編 1987『箕谷古墳群』
- 横田真吾 2018「熊本県熊本市宮穴横穴群出土の遺物について」『書陵部紀要』第69号〔陵墓篇〕
- 横田真吾 2022「群集墳の特性」『淀川流域の古墳時代』季刊考古学・別冊39、雄山閣
- 横田真吾 2025a「書陵部所蔵品の蛍光X線分析(2)」『書陵部紀要』第76号〔陵墓篇〕
- 横田真吾 2025b「堅穴建物出土の耳環について」『待兼山考古学論集Ⅳ』大阪大学考古学研究室
- 吉川真司 2022「片岡四寺考証」『聖地霊場の成立についての分野横断的研究』京都府立大学文学部歴史学科
- 吉田英敏 1999「耳環」『船来山古墳群』糸貫町教育委員会・本巢町教育委員会
- 渡辺智恵美 2003「尼寺廃寺塔心礎出土耳環の自然科学的調査」『尼寺廃寺Ⅰ』香芝市教育委員会

[挿図表出典]

図1、3、4、5は筆者が作成した。

図2は筆者の資料調査で作成した実測図と奈良文化財研究所による飛鳥寺出土耳環整

理報告中の透過X線写真(石橋ほか2017)を参考に筆者が作成した。

表1は筆者の資料調査で取得した情報に、飛鳥寺出土耳環報告の重量(石橋ほか2017)、四天王寺出土耳環報告の重量(比佐ほか2025)の小数点第三位を四捨五入した値、尼寺廃寺報告の重量(香芝市二上山博物館編2003)を加えて筆者が作成した。

謝辞

資料調査と図面掲載では、下記機関にお世話になりました。記して感謝申し上げます。飛鳥資料館、香芝市教育委員会、橿原考古学研究所附属博物館、柏原市教育委員会、宮内庁書陵部、四天王寺、中宮寺、奈良国立博物館、奈良文化財研究所、兵庫県立考古博物館、袋井市教育委員会、文化庁、前橋市教育委員会、本巣市教育委員会

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

Classification and chronology of earrings uncovered from the Central Pillar Foundation Stone of Pagodas in Ancient Japan

Shingo YOKOTA

Earrings (*jikan* 耳環) are metal ornaments that were mainly made from the Kofun period to the Asuka period. Earrings have been uncovered from the pagoda's central pillar foundation stone at four temples: Asukadera Temple, Shitennoji Temple, Chuguji Temple, and the Ninji Abandoned Temple. These temples are important reference points when considering the dating of earrings. However, perhaps due to their simple shape, earrings have not been the subject of comprehensive chronological research until now.

First, I classified earrings based on their material. Earrings can be classified by the metal material used. As a result of this classification, I confirmed that differences in material represent the level of hierarchy of the earrings. Next, I constructed a chronology of the earrings based on reference materials. The size and shape of the earrings reflect the period of manufacture. The chronology revealed that there was no discrepancy between the construction date of the temple and the production period of the earrings.

In addition, as a result of the classification and chronology, no contradictions were found regarding the hierarchy of temple founders and the earrings.

Finally, according to the chronology of earrings uncovered from the central pillar foundation stone of pagodas, the fourth quarter of the seventh century witnessed not only an end to the practice of burying earrings but also an end to the production of the earrings themselves.